

エンドクラウンを用いた歯冠長の短い歯冠修復の 1 例

A case of restoration to short crown length by Endo-Crown



日本臨床歯科 CAD/CAM 学会 東北支部

小笠原 正卓

Masataka Ogasawara

目的

CAD/CAM を用いた歯冠修復の予後について、支台歯の形態は重要な要素である。しかしながら、歯冠長が短く、理想的な支台歯形態が得られない症例については、修復材料の破折を防止するため、一定のクリアランスが必要となり、結果として支台歯形態を妥協的なものにせざるを得ない例が散見される。今回、CAD/CAM を用いたエンドクラウン修復を経験したことから、歯冠長が非常に短い不利な状況下での歯冠修復についてその要件について考察してみたい。

症例

58 歳女性。主訴は 47 の腫脹。診査の結果、47 根尖性歯周炎と診断し、根管治療後、歯冠修復を行うことにした。患者は同部に対し金属修復ではなく審美修復を望んだため、CAD/CAM によるハイブリッドレジン（接着：Panavia V5®（クラレノリタケ））のエンドクラウン修復を行うことにした。現在まで 3 年 8 ヶ月経過を追っているが特に問題事象は発生していない。

考察

金属を用いた歯冠継続歯など、歯冠修復と支台築造体とポストが一体となった修復は、古くから行われてきたが、垂直性歯根破折の原因となること、接着破壊が容易に起こることなどから現在ではあまり行われなくなった。しかしながら、今回供覧した症例のように、築造と歯冠修復物を別々に作成することが脱離の原因につながるなど、いわゆるエンドクラウンにて対応せざるを得ない症例にどのように対応するのか、様々な議論がある。歯冠修復を行う目的は、歯冠形態を回復することによる機能の改善が主なものだが、根管治療が施された歯にとっては、垂直性歯根破折の原因とならないこと、辺縁漏洩による根管への細菌の再感染を防止することも、要件として求められる。材料学を含めた CAD/CAM の技術の進歩が、通常は困難な歯冠修復も、より良好な予後が期待できるのではないかと。